

序

ながえ まなぶ
永江 学*

現在、臨床の現場において臨床検査の情報は病態把握を行ううえで不可欠なものとなっています。また、検査を行う者にとって検査の意義や操作法などを十分に理解しておくことが重要であり、日々進歩し続けている検査法の知識の習得も検査を行う者に課せられた義務といえます。

近代医療の現場では、その時代の先端の工業技術を取り入れて診断や治療を行っています。その最たる例として心電図やX線写真が挙げられます。現在ではMRや超音波断層像に代表される形態診断と、心電図や脳磁図に代表される機能診断とに大きく分類することができます。臨床検査技師が関与する形態診断検査としては、内視鏡、MRI、MRA、超音波検査などがあり、機能診断検査としては、心電図、脳波、脳磁図、ファンクショナルMRI、脈波、ドプラ、サーモグラフィなどがあります。

今回の増刊号では、現在一部の施設で行われているトピック的な臨床検査法ではあるが、今後広がっていく可能性が高い検査法について基礎から臨床までをわかりやすく解説してもらい、読者の方々が数年後に行うときの参考書に十分なりうるよう執筆してもらいました。

また、ある程度の施設で行われている検査については再確認の基礎知識と臨床知識を中心に、さらなる検査法の広がりをもたせるような技術的なポイントを加えて執筆してもらっています。読者の皆様が本号をお読みになればわかるように、新たな装置を購入しなくても既存の装置で行える検査法も収載されていますので、知識と技術の習得

を行い臨床側へ新たな検査項目追加を提言されてははいかがでしょうか。それもまた本書の活用かと思えます。

特に、近年の臨床検査部運営では検体検査部門の外注化や院内ラボなどによって検体検査分野の技師が生理部門に配置換えされるケースが増えてきています。増員が難しいこの時代に増員される生理部門においてはさらなる検査枠の拡大を考えていかなければならない時代であると考えます。また、生理部門は技師個人の能力が問われる職場でもありますので、常に個人が新しい知識と技術の吸収を行っていくことが大事であります。

患者接遇においても、新たな考え方が起こってきています。一例として、乳腺超音波検査を女性技師に任せる病院があります。今までは医療の現場だからとの理由で女性患者の恥じらいを無視してきた傾向がありましたが、これからは患者の気持ちに立った接遇が必要になってきます。特に患者と接する生理部門では検査技術と同様に接遇技術も重要な要素であります。

本号で取り上げた検査に関する装置の一覧を巻末に掲載いたしました。学会などでの機器展示に参加できない方や、機器に興味があるが情報をどのように取るかわからない方などにきっと役立つと思いますので、ご活用ください。

本号に掲載されている検査は、決して遠い未来のものではありません。数年後には本号で掲載した検査の大多数が生理部門で日常検査として広く行われていることを願っております。

* 聖マリアンナ医科大学医学情報センター ☎216-8511 神奈川県川崎市宮前区菅生 2-16-1